

市長賞

犯罪、非行のない社会に向かって

堺市立 八下中学校 三年

松 本 颯 真

私は、この作文を書くため、犯罪、非行をしてしまった人の共通点はないか探してみた。ウェブ版の福祉新聞の虐待についてのページや、法務省の令和六年度版の犯罪白書などのサイトを見てみると、全てに共通するものは見つからなかったものの、六割の人が両親からの虐待などにより心に傷を負っていることが分かった。そして私は、心に傷を負った人に対する身近な人たちの関わり方によって犯罪や非行を未然に防げるのではないかと考えた。なぜそう考えたのかというと、私自身が心に深い傷を負ったことがあるからだ。

それは小学五年生の頃だった。私は普通に学校生活を送っていたが、ある時私の名前に菌をつけて呼んでいる声を耳にした。きくと聞き間違いだろうと思ったが、実際裏では私の名前に菌をつけられ、とても嫌われているようだった。しだいにあからさまに私への周りからの対応が悪くなっていった。あの頃は本当につらかった。クラスに私の居場所はないと思ったほどだ。勇気を出し、当時の担任の先生に伝えると、一度でも私のことをそう呼んだ人

に対し、とても怒ってくださった。その人たちも私にちゃんと謝ってくれた。しっかり仲直りし、今では仲良くしている人もいる。でも、あの頃のことは忘れられない。このような経験をしたため、相手を信じ切れないことが今もある。自分が受けた心の傷はいつまでもなくなることはないと思っている。それほど心の傷は治りにくく、つらいものだ。

私はあの頃、先生に相談してよかったと今でも心から思っている。心の傷は誰かに相談して初めて治り始め、人は前を向くことができる。自分が体験したからこそ、このことの重要性を伝えることができる。もしあの時先生に相談できていなかったら、ずっとうつむいたまま生きることになっていたかもしれない。人を信じられなくなっていたかもしれない。心の傷が深ければ深いほど人に相談しづらくなる。私はうまく立ち直れたかもしれないが、心に深い傷を負ったまま誰にも相談できずに苦しんでいる人はどうなるだろうか。それは悪い時には犯罪や非行といった行為をすることになるかもしれない。だからこそ相談しようと思える相手

がいること、そんな場所があることが必要になってくる。地域全体でその人を守ってあげることができれば、その人は前を向けるのではないだろうか。明日へ、未来を進もうという気持ちで、本人の心に生まれるのではないだろうか。

私は以上のことから、犯罪、非行をした人の更生よりも、犯罪、非行に走ってしまう前に止めることにみんなが力を入れる方がいいと思う。犯罪、非行はもちろんあるよりない方がいいからだ。

この作文を読んでいる皆さん。周りを見てください。落ち込んでいる人はいませんか。しんどそうにしている人はいませんか。もしいたなら声をかけてあげてください。その人を助けることができるかもしれない。自分のできる範囲で周りの人たちを助ける。世界中の人たちがそうすることができれば、今よりもっといい社会を私たちの手で築くことができるのではないだろうか。私自身も、これから自分のように傷ついてしまう人が出ないように、もし傷ついている人がいたら少しでも助けになれるように行動していきたい。

